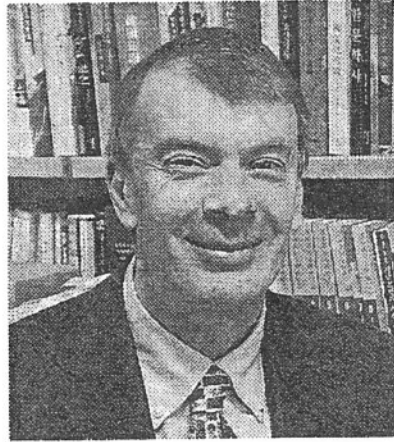


地球温暖化、生物多様性の減少、産業汚染物質、原発事故や使用済み核燃料の処理……。われわれは数多くの環境破壊の中で生活するようになった。これらの環境破壊と考古学は一見関係なさそうだが、私は環境問題の解決や持続可能な社会づくりには、考古学が大切な役割を担うと考える。

考古学は、長期にわたる人間が環境と、どう関

西九州大学教授

マーク・ハドソン氏



1963年イギリス生まれ。オーストラリア国立大学文学部考古学・人類学博士課程修了。西九州大学持続的・環境文化研究所長。専門は考古学と人文環境学。佐賀県神崎市在住。

わり生活を営んできたか、追及する学問でもある。ローマ帝国、マヤ文明、イースター島、バイキング期のグリーンランドなどの研究から、過去の社会が変化に対応した要因として、多様性、自立性、社会ネットワークの充実、冗長性やイノベーション(社会改革)などが挙げられる。

現代社会の資本主義における資源利用の制度

がだんだん複雑になり、その複雑さを支えるコストが高くなりすぎたときに崩壊に向かうのだ。

日本の考古学では、環境適応や社会崩壊の研究はまだ少ないが、参考例は多い。縄文時代の九州には、鹿児島県南部にあつた直径19mの鬼界アカ

ホヤ火山の大噴火、縄文海進と呼ばれる海水面上昇、朝鮮半島からの農

耕民の渡来などがあり、

過去から未来を見通す力に

考古学が担う大切な役割

縄文人の生活環境を大きく変化した。鬼界アカホヤ噴火後、九州が一時無人島になった説もある。縄文社会各地の危機対応を知るのには、現代社会の教訓となろう。

考古学は遺跡を通して、人間と自然環境の関係をみる。遺跡は、過去の人間がどこにどのような社会を形成し、どんな技術を持ち、どの地域と交流し、生活していたか、その生活と社会の維持のために、どんな生態系の知識があったかを語る宝物だ。同時に、現代の生活の場に関する文化的・感情的・象徴的価値を高め、いわゆる「場の感覚」を強める役割も持つ。

遺跡の保存には、各自治体に世界遺産認定を目指すなど幅広い取り組みがあるが、私は持続可能な未来に向けて、自然環境と文化の関係が分かる「環境文化遺産」という新たな概念が必要と思う。考古学は、長期にわたる人類の歴史的な変化が分かるからこそ、将来の方向性が見える。考古学は主に過去を研究するが、未来をみる力もある。

